【山崎浩司（東京大学特任講師）】 東京大学の山崎浩司です。本日はよろしくお願いいたします。私の専門は社会学、特に医療社会学で、普段はガン、エイズ、緩和ケア、死別悲嘆などについて研究をしていますが、もう一つ、今日のテーマであります、漫画における死生の問題に関する死生学的研究を行っております。もともとこのセッションでは私が先に発表する予定になっていたのですが、鄭先生のご発表の方がより包括的な内容でしたので、そちらを先にやっていただいてから、私が各論的に個別のテーマを発表させていただくことにいたしました。

それではこれからスライドをお見せしながら発表を進めていきたいと思います。

原爆マンガにおける責めの考察
――『夕凪の街 桜の国』を題材に

山崎浩司
東京大学特任講師

一・はじめに

原爆被爆国である日本は、その不幸にして特異な体験を生きた人びとが、世界で最も多く住んでいる国である。被爆体験を「生き延びた」ではなく「生きた」としたのは、ひとつは、生きた痕跡はあっても生き延びられなかった無数の人びとがいることを表すためであり、いまひとつは、過去形ではなく現在完了形としてこれまで被爆体験を生きてきて、今もそれを生き続けている人びとがいることを確認するためである。また、この体験を生きた「日本人」ではなく「人びと」としたのは、マジョリティである日本人の陰に、朝鮮人を中心に東アジアの隣人が少なからずいたことに、思いを馳せるためである。[1]

六十五年の歴史をもつこうした状況と、中国が核兵器保有国であり、北朝鮮もその仲間入りをほのめかしている現状に鑑みると、日本の、そして、東アジアの死生学は、原爆／核をその切実なテーマのひとつとして位

置づけざるを得ない。特に日本の死生学は、日本社会が他のどの社会よりも、このテーマについて数世代にわたって、当事者ならびに非当事者が、特にマスメディアを介して言説を積み重ねてきた歴史をもつことから、調査、考察、施策などの各方面で、主導的役割を果たす責務があろう。[2]

そこで本論では、原爆をテーマにした死生学的考察を試みる。具体的には、『夕凪の街 桜の国』という原爆マンガを題材に、そこに描かれる原爆にまつわる責めを検討する。以下、手始めに、『夕凪の街 桜の国』が分類される原爆マンガというジャンルについて説明する。続いて、作中から三つの場面を選択し、被爆者である主人公が各場面で、どのような責めを誰に向けているのかを分析する。その結果を踏まえて、最後にこの作品に関する既存の論考から得られる洞察を絡めながら、加害者対被害者といった従来からある二項対立に回収されない原爆責任論と核なき世界の訴え方の可能性を示唆し、本論を締めくくりたい。

山崎浩司氏

二、原爆マンガというジャンル

日本のマンガは、①その読者層が子どもに限定されず、上は六十歳以上まで広がりをもっているうえ、知識人層にも少なからず浸透していること、②そうした多様な世代や社会層のニーズに応えるべく、それが小説や映画と同じくらい（またはそれ以上に）実に多様なジャンルをカバーしていること、③その全出版物の年間販売部数に占める割合が約三十五％にのぼること、[3]④アニメ化、テレビドラマ化、映画化などの「メディアミックス」

によって、その内容が広く社会に流通することから、現代日本における影響力は決して小さくない。

本論でとりあげる『夕凪の街 桜の国』は、「原爆マンガ」というジャンルに分類できる。原爆マンガを原爆体験がテーマの中心である作品と定義すると、総数は十数作品にしか満たない。というのも、娯楽を主たる目的とするマンガでは、往々にして政治的・思想的色合いを帯びやすい原爆というテーマは、重たすぎるものとして敬遠されてきた経緯がある。[4]

原爆マンガの歴史は、[5]一九五七年に谷川一彦が少女マンガ誌『なかよし』に連載した「星はみている」に始まる。この作品は数年前に広島平和記念資料館（原爆資料館）によって発見されたばかりで、[6]それまでこのジャンル最古のマンガは、一九五九年に白土三平が発表した『消え行く少女』と思われていた。『消え行く少女』は今でも名作の誉れ高く、[7]当時の「難病少女もの」マンガの流行、原水爆禁止運動、強制連行されていた朝鮮人の第一次引き揚げ、といった時代背景の下で描かれた。[8]

その後、この作品に続くものは長らく刊行されず、一九六〇年代に入っても原爆マンガはマイナーな存在であり続けた。わずかに、山岸涼子が一九六七年に女性誌『セブンティーン』八月号に「夏の寓話」[9]というエピソードを掲載したのと、一九六九年に『ある惑星の悲劇――在東京・広島における一被爆者の記録』[10]という、マンガと記録文が一冊に綴じられた書籍が刊行されただけである。一九七〇年代も、辰巳ヨシヒロが『週刊プレイボーイ』一九七一年九月十四日号・二十一日号に、「地獄」[11]という作品を掲載した時点では、相変わらず原爆マンガと大ヒットは無縁と思われた。

ところが、数年後に異変が起きる。自身被爆者である中沢啓治（一九三九年生まれ）の自伝的マンガ『はだしのゲン』[12]の登場である。この作品は、一九七三～七四年に『週刊少年ジャンプ』に連載され、一九七五年に全四巻のコミックとしてひとまず刊行されると、同年にそれを全国被爆教師の会や広島平和教育研究所が、平

和教育の教材として積極活用すると決定したこともあって、全国に読者を獲得していった。[13] 結果的に、『はだしのゲン』は日本全国の多くの小中学校図書館に配架されただけでなく、[14] 実写映画化（一九七六年・七七年・八〇年）、アニメ化（一九八三年・八六年）、テレビドラマ化（二〇〇七年）といったメディアミックスが、現在に至るまで何度も行なわれる大ヒット作となった。そしてその読者は国内にとどまらず、[15] 二〇〇五年現在までに少なくとも十一言語に翻訳され、世界中の人びとに読まれている。

こうした『はだしのゲン』の大ヒットにもかかわらず、その後また長らく原爆マンガはジャンルとして大きく発展しなかった。終戦五十周年にあたる一九九五年に、三枝義浩が「ヒロシマの証言」という短編ドキュメンタリーマンガを刊行したくらいである。

再び原爆というテーマが、マンガ界およびマスメディア全般で脚光を浴びたのは、二十一世紀に入ってからである。二〇〇四年に、こうの史代（一九六八年生まれ）が『夕凪の街 桜の国』[16] を刊行すると、同年度の第八回文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞と第九回手塚治虫文化賞新生賞をダブル受賞し、新聞や雑誌でも絶賛され、二〇〇七年には実写映画にもなって、マスメディアを賑わした。[17] 本書は二〇一〇年十月二十九日現在、累計販売部数三十八万五千部を記録している。[18] こうのによれば、読者は「男女同比率。年齢層は、二十代から五十代まで。マンガオタクといわれるようなタイプから、書評で取り上げられているので読んでみたという人まで」多様だという。[19]

また、こうのは『夕凪の街 桜の国』の続編といえる『この世界の片隅に』（上巻・中巻・下巻）[20] を二〇〇八年から翌年にかけて刊行し、こちらも（二〇〇九年度）第十三回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞。書評も極めて好意的なものが多く、『夕凪の街 桜の国』同様、多数の読者を獲得している（二〇一〇年十月二十九日現在の全三巻累計販売部数は二十四万九千部）。[21] こうのによるこれらの作品は、『はだしのゲン』以

来の大ヒットであり、コアなマンガ読者を超えて社会的インパクトをもったことから、原爆マンガのジャンルにおける新たな古典となる可能性を秘めている。

三・ 責めの場面の分析

『夕凪の街 桜の国』は、「夕凪の街」、「桜の国（一）」、「桜の国（二）」の三編で構成された連作短編集である。このうち本論では「夕凪の街」に注目する。この物語の舞台は、原爆投下から十年経った一九五五年、広島市内の基町バラック（通称「原爆スラム」）。主人公の皆実（みなみ）は二十三歳の女性で、やはり被爆者である母と同居し、家事をしたり、仕事に行ったり、職場の同僚男性に好意を抱いたりと、およそ淡々とした日常を送っている（図1）。

一――場面一：「自分」に向けられる責め（十五～十六頁）

そんなある日、皆実は銭湯で人びとの身体に刻まれた被爆の傷跡を見ていた。すると、被爆直後の惨状のフラッシュバックが起こる。皆実は自らの身体にも刻まれた原爆のスティグマを見つめながら、心のなかで呟く――

ぜんたい、この街の人は不自然だ。誰もあの事を言わない。いまだにわけが、わからないのだ。わかっているのは「死ねばいい」と、誰かに思われたということ。思われたのに生き延びているということ。そし

ていちばん怖いのは、あれ以来、本当にそう思われても仕方のない人間に自分がなってしまったことに、自分で時々気づいてしまうことだ。（十五〜十六頁、図1）

当事者であるはずなのに、「この街」に住む自分たち被爆者の「誰も」が、十年前の原爆投下がもたらした惨劇について語らないことを、それが誰にとっても容易には理解しがたい体験だからということに理解を示しながらも、皆実はまず責める。つまり、責めは同じ街に住む自分たち被爆者自身に向かう。

続いて、自分たちが「『死ねばいい』と、誰かに思われた」という強烈な不条理について、そう思った相手を皆実は「誰か」としか特定せず、さらにこの理不尽な行為の主体を責めずに、ただそうした行為の存在を認めるにとどめる（「わかっているのは……」）。また、この文章は受動態で書かれており、それが「死ねばいい」と思われた責めは自分たちにあるとのニュアンスを生みだしている。続く文章は、そのニュアンスに「（死ねばいいと）思われたのに生き延びている」という、相手の意図に反している自分たちの状況への後ろ

図1　©『夕凪の街 桜の国』／こうの史代／双葉社

めたさを加えている。

そして、最後の一文で初めて「自分」という主語が明示される。「自分」は、原爆が投下された十年前の八月六日以来、「誰か」に存在を否定されても反論できないような人間に本当になってしまったことと、十年経って平穏さを取り戻したかに見える日常のなかでなお、ふとしたときにそれに「気づいてしまう」ことが、原爆がもたらした最も恐ろしい災厄であると主張される。いわば人間性喪失に対する恐怖の表明である。

ここで「わたし」ではなく「自分」という語が使われているのは興味深い。「わたし」であれば他の誰でもない己（つまり「自己」）というニュアンスが鮮明になるが、「自分」という言葉には、他者との関係性のなかの「自らの分けまえ」[22]という響きが残る。被爆によって存在を否定されても反論できないような人間になったのは、他ならぬ皆実自身であると同時に、彼女と同じく「自らの分けまえ」をこの街の被爆者コミュニティから得ている他の被爆者でもあると、ここでは解釈できる。つまり、こうした人間性喪失の責めを、皆実は街の他の被爆者と分有する「自分」に向けていると読める余地がある。

二――場面二：「わたし」に向けられる責め（二十二～二十六ページ）

ところが、次の責めの場面になると、「わたし」の「自分」からの分化がより鮮明になる。橋の袂で、好意を抱いていた職場の男性打越（うちこし）と初めてキスをし、愛を確認しあった瞬間、皆実は再び「あの日」のフラッシュバックに襲われ、打越を振り払って走り去る。だが、土手の草に足を捕られて転んでしまう（その草はまるで人の手のような形で、皆実の足に絡みついている）。そして、フラッシュバックは皆実の回想の語りとともに続く――

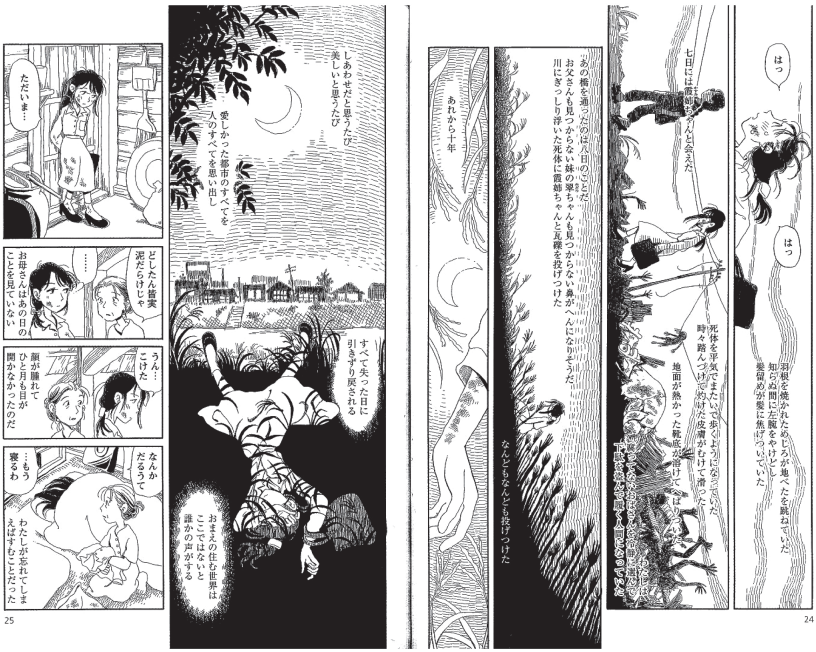

図 2　©『夕凪の街 桜の国』／こうの史代／双葉社

八月六日（水をください　助けてください）何人見殺しにしたかわからない。塀の下の級友に今助けを呼んでくると言ってそれきり戻れなかった。

……七日には霞（かすみ）姉ちゃんと会えた。死体を平気でまたいで歩くようになっていた。時々踏んづけて灼けた皮膚がむけて滑った。……わたしは、腐ってないおばさんを冷静に選んで、下駄を盗んで履く人間になっていた。

あの橋を通ったのは八日のことだ。

……川にぎっしり浮いた死体に霞姉ちゃんと瓦礫を投げつけた。なんどもなんども投げつけた。

しあわせだと思うたび、美しいと思うたび、愛しかった都市のすべてを、人のすべてを思い出し、すべて失った日に引きずり戻される。おまえの住む世

界はここではないと、誰かの声がする。（二十三〜二十五頁、図2）

「塀の下の級友に今助けを呼んでくる」と約束し、それを守らなかったのは、他でもない「わたし」だった。死体を平然とまたいだり踏んだりしたのも、汚れていない下駄を死人から剥いだのも、「わたし」だった。

ただ、石を投げつけて死者を冒涜したのは「わたし」だけでなく、「霞姉ちゃん」もである。ところが、この場面の先の三十頁に描かれているのだが、その姉は二ヵ月後に死んでしまう。そして、死ぬことで生きていたときに死者にした仕打ちは免罪され、姉は「わたし」の共犯者ではなくなってしまう。それどころか、彼女は「おまえの住む世界はここではない」と「わたし」に迫る「誰か」の一人になってしまい、結局責めは「わたし」だけに向けられる。

いまや体中に絡みついた草（死者の手）を払い、その責めから何とか逃れ、やっとの思いで帰宅すると、母は驚いて皆実に尋ねる――「どしたん、皆実、泥だらけじゃ」。そのコマと続く二コマには、皆実の心情を理解できない顔をする母と、その母を突き放す眼差しや態度を見せる皆実が描かれ、同時に彼女の声なき独白が示される――

お母さんはあの日のことを見ていない。顔が腫れて、ひと月も目が開かなかったのだ。わたしが忘れてしまえばすむことだった。（二十五頁、図2左端）

ここには、日常でもっとも身近な存在で、ともにこの街の被爆者として生き続けている母が、実は皆実にとって決して「自分」と責めを分有しえない存在であることが描かれている。加えて、続く三つのコマでは、

父は職場で爆死し、妹は行方不明になり、弟は五年も前から遠くに疎開に出していて、「すっかり見知らぬ少年で、広島へ帰るのをむこうのことばで嫌がった」ため、伯母夫婦に「養子に出すことになった」ことが明かされる。つまり、母以外の他の家族もまた、皆実とともに責めを負えないことが確認され、やはり責めは「わたし」だけに向けられる。

この責めから逃れるために、皆実は「あの日」の記憶を忘れるという方法を試みたが、それがうまくいかなかったことは、「わたしが忘れてしまえば、すんでしまう事だった」、そのはずだったという言い回しで表現される。そして、浜邦彦が「塀の下の級友」との約束を皆実が守れなかったことについて以下で指摘するように、「あの日」の記憶の忘却は不可能なのだ――

> 約束という言語行為が、皆実をその場面に縛りつけている。約束した相手が亡くなってしまえば、この約束も消えるのだろうか。そうではない。それとは逆に、果たせなかった約束――ここで待っとってね――として、いつまでも消えないまま、向こう側で、皆実を待ち続けるのである。[23]

三――場面三：「原爆を落とした人」に向けられる責め（二十八～三十四頁）

これまでの描写の分析から分かるように、この作品における原爆にまつわる責めは、「あの日」の記憶の領有と、生き延びていることと、その記憶や思いを分かち合えないことなどを条件に発生し、くり返される。そして、生きるかぎり「あの日」の記憶や思いは忘れ得ないとなると、「わたし」に向けられた責めから解放されるには、それらを他者と分かち合ってみるしかない。

そこで、ついに皆実は打越に胸の内を明かす――

……教えてください。うちはこの世におってもええんじゃと、教えてください。十年前にあったことを話させて下さい。そうしたら、うちが死なずに残された意味が、わかるかも知れん。そうしたら、打越さんに逢うた事とかを、姉や妹やみんなに、すまんと思わんですむかもしれん。（二十八頁）

それに対し、「うん…そうじゃないか思うた」と打越は笑顔で応える。彼は皆実を受け容れる。そうして受け容れられた皆実は、「ハー、なんか体の力が抜けてしもうた」と安堵する。打越は続ける――「平野さん、生きとってくれて、ありがとうな」。そして二人は手をつなぐ。皆実の生が肯定される。皆実はみずからを責めから解放し、幸せになる自分を受け容れることにする――「そしてそれきり、力は抜けっぱなしだった」。

ところが、責めから解放されて幸福に向かうはずの皆実の生は急速に暗転していく――

翌日会社を休んだ。……打越氏に「おまえ」と呼ばれた。……うたっているのを初めて見た。……そしてそれきり、朝には足が立たなくなっていた。

朝、お母さんがお粥を作ってくれた。……それきり午後には何も飲み込めなくなった。夕方、お医者様が栄養剤を打ってくださった。

……わたしが寝込んでから、母もわたしも、ひと言も（原爆症で死んだ）姉の話をしなくなった。夜おそく、まっくろな血を吐いた。（図3）

翌日から、いろんな人がお見舞いに来てくれた。……そしてそれきり目も見えなくなった。……だまって

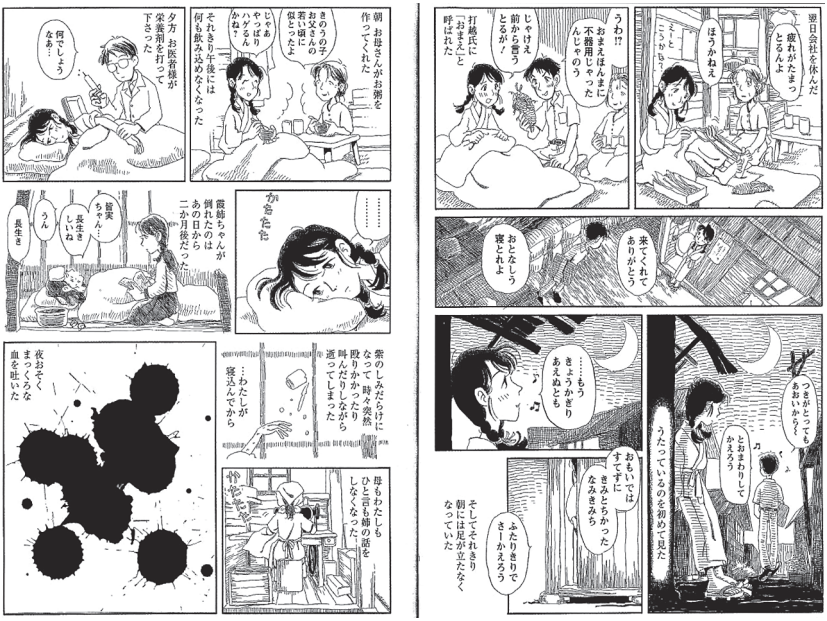

図3　©『夕凪の街 桜の国』／こうの史代／双葉社

手を握る人がいた。知っている手だった。痛い。のどをまた、生ぬるいかたまりが通ってくる。もうただの血ではなくて、内臓の破片だと思う。うでは便器を持つのが精一杯。髪も抜けとるのかも知れんが、触って確かめる気力もない。あしたにしよう……あした……（三十～三十三頁）

やっと自責から解放され、不安が薄らいだ矢先、不安は現実――原爆症――となって迅速かつ容赦なく皆実を蝕み始める。ここに至って皆実はついに、この計り知れない理不尽を自分にもたらした相手に初めて責めを向ける――「嬉しい？　十年経ったけど、原爆を落とした人はわたしを見て、『やった！　またひとり殺せた』とちゃんと思うてくれとる？」

この強烈な皮肉は、「原爆を落とした人」

に対し、原爆を無差別大量殺戮兵器ではなく、ささやかな日常を紡ごうとする一人ひとりの「わたし」の生を抹殺する兵器であると、「ちゃんと」自覚して使ったのか。そして、「わたし」に向けた「死ねばいい」との思いを長い年月忘れずもち続け、それが実際の「わたし」の死によって遂げられたことに、「ちゃんと」満足しているか、を静かな怒りを込めて問責している。この世における存在を肯定され、やっと死の搦め手から解放されたと思った矢先に、けっきょく死の潮によって彼岸に流されてしまうことのやるせなさを、皆実はこの帰結を招いた直接の原因をつくった者に向けざるを得なかった。

だが、最後に初めて他者に向けたこの怒りの責めさえも、皆実は最期にその矛先を鈍らせ、独白のような嘆きに変える――「ひどいなあ。てっきりわたしは死なずにすんだ人かと思ったのに」。人智の及ばない運の要素に言及することで、特定の「原爆を落とした人」の加害者化がやはり抑制されている。

四．加害と被害の二項対立を超えて――原爆の悲しみと日常への哀れみを読みとる

一――傷つけられた者に自責をもたらす原爆の悲しみ

原爆責任論の枠組では、侵略戦争を頑なにやめず、周辺諸国に多大な被害を与え続ける日本の軍国主義を止めるために、原爆投下は必要であった――つまり、加害者自らが招いた罰であり責めである――という認識が、アメリカでは主流である。[24] また、韓国語版『夕凪の街 桜の国』の出版に際し、現地の出版社が、作者と日本の出版社の了解を得たうえで、「原爆投下は戦争を終わらせるためのやむを得ない決定だったが、これはあのとき、犠牲になった人々の苦痛と悲しみについての物語である」との文言を帯に付す判断をしたことから

も、加害国日本の横行阻止による第二次世界大戦の終結のための原爆投下という見方が、韓国でも人口に膾炙していると思われる。[25]

原爆マンガの古典である『はだしのゲン』には、主人公ゲンの母親である君江が次のように語る場面がある――

まったく日本人はおめでたいよ！　戦争でもうけるやつにすっかりおどらされて、天皇陛下をしんじてはだかにされて…天皇陛下もかってすぎるよ…。戦争にまけるとわかったんなら、なぜもうすこしはやく戦争をやめてくれなかったのかね…。せ…せめて一週間まえに戦争がおわっていれば、広島も長崎も新型爆弾をおとされず、なん十万の人たちが死なずにすんだのに…

（三巻一九三頁、図4）。

この描写では、「加害国日本」のような国単位のくくり方は採用されていないが、加害者としての「戦争でもうけるやつ」

193

図4　©『はだしのゲン』／中沢啓治／汐文社

や「天皇」に対して、彼らに踊らされた「おめでたい」一般庶民＝被害者という二項対立構造にはなっている。そして、「おどらされて」侵略戦争に加担したのだから、結局国全体としてやはり自分たち日本人は加害者であり、原爆を落とされたのは仕方がなかったという図式に乗っている。

前節で分析した「夕凪の街」では、原爆にまつわる責めは「この街（広島）」の被爆者である「自分」たちや「わたし」自身に向けられていた。自分たちに向けられているという意味で、責めのベクトルは、上の『はだしのゲン』の例と重なる。しかし、責めの中身を見ると、それは原爆を使わせてしまったことよりも、原爆で死ななかったことに向けられている。加害者対被害者の対立構造は、直接的であれ間接的であれ災厄をもたらした者を特定し、その者に責めを向けることで成立するわけだが、「夕凪の街」では、災厄をもたらされた者が、生き残ったがゆえに（死者を介して）自らを責めるという構図が中心になっており、原爆責任論における一般的な二項対立が迂回されている。

「夕凪の街」で描かれている責めには、分析で見たように、一人称複数形の「自分（たち）」に向けられたものと、一人称単数形の「わたし」に向けられたものがあったが、どちらもいわゆる自責である。より厳密には、それは災禍の生存者がしばしば直面するサバイバーズ・ギルト（survivor's guilt）――自分が生き残ったことに対して生存者が抱く罪の意識――である。サバイバーズ・ギルトは、助けるべき人（びと）を助けられなかった、または、自分の代わりにその人（びと）は死んでしまった、といった罪悪感に基づく。[26]

ここで、この定義に一見適合しなさそうな自責行為について、あらためて触れておきたい。それは、皆実が姉と行なった、「川にぎっしり浮いた死体」に向かって瓦礫を幾度となく投げつけるというものである。もしサバイバーズ・ギルトを抱く者に上述の罪悪感が根底にあるのなら、皆実は死者を哀悼するのではなく、なぜ瓦礫を投げつけるような冒涜をしたのだろうか。この点について前出の浜は、次のような解釈を提供す

る――

あのような（おぞましい）姿で川面を埋め尽くしている死者たちを許せないのは、自分もまたその「ひとつ」であったかもしれないことを、この上もなくあからさまに思い知らされるからである。……死者たちは、これがお前の姿だったのだ、お前はたまたま、髪の毛一本ほどの偶然で、このような姿にならずにすんだだけなのだ、と囁きかける。自分がそうであるべきだったということを思い出させるためだけに、このような姿で私を侮蔑し、恥じ入らせている……。自分を見捨てて先に逝ってしまった死者たちへの非難、それは裏を返せば、死者たちが生き残った自分を非難していることへの非難なのである。[27]

死者からの責めを責めで返して相殺を図ろうとするかに見えるこの行為は、現実には責める力をもたない死者を、自責のために利用したうえにさらに責めを加えているので、相殺しないどころか自責を倍加させることになる。

「夕凪の街」で、皆実は死者を踏んだりまたいだり、死者から物を奪ったり、死者に瓦礫を投げつけたりしているが、そうしたからこそ、彼女は原爆によって日常を突き破り突然現れた生き地獄を、実際的にも心理的にも破壊されずに生き延びることができた。つまり、皆実の生の代償として、死者はまさに死に、利用され、冒涜された。だが、そうして生き残った皆実は、必ずその責めを負わねばならなかった。それが、消えることのない「あの日（あの惨劇）」の記憶の領有であり、フラッシュバックであり、死者の呼ぶ声であった。

結局この作品が示唆しているのは、原爆の被爆がもたらす惨状を生き延びようとすれば、それが日本人であれ、アメリカ人であれ、朝鮮人であれ、誰であれ、等しく――

① この自責――アウシュヴィッツの生存者プリーモ・レーヴィの言う「人間的な連帯において失格したという告発、あるいは自己告発」[28]――を負ってしまう可能性が高いということ、
② その責めを負った場合、自分の体験を他者と分かち合うことや、その帰結として他者から己の生を肯定してもらうのは容易でない可能性があること、
③ たとえこれらを実現して自責から解放されても、原爆症によって命を落とす恐れはつきまとい、それが現実となる可能性があること、
④ そもそも私に向かって原爆が落とされるということは、そこに私の存在を否定し抹消したいと思う「誰か（同じ人間）」がいたことの確認になってしまうということ

――であった。そして、すでに傷つけられた者のこうした自責による苦しみの増大は、核兵器がある限り、場所・人・時代にかかわらず起こりうるため、それは人類全体の悲しみであるということなのだろう。そうであるならば、原爆にまつわる責めを考えるとき、人類にこうした悲しみをもたらす兵器を生み出してしまったこと、使ってしまったこと、そしていまだ数多く生産・保有していることの責任は、個別の国家や集団を超えた人類全体の次元において問われねばならない。

二――原爆にさえ破壊しつくされない日常への哀れみ

原爆責任論を加害者対被害者の二項対立から解放し、原爆が人類全体にもたらす悲しみを問う――本論で

は、そのように「夕凪の街」が読めることを示してきた。しかし、この作品が、「広島の記憶の世界化、原爆の記憶の普遍化を装いつつ、その実『唯一の被爆国』『日本』というナショナルな潜在的感情に訴えかけようとしている側面は否定できない」[29]という評価も一方である。

そう評価する川口隆行は、こうのが丹念に描き出している皆実の日常生活の場である「原爆スラム」では、実際にはその住人の多くがそもそもこのコミュニティを発展させた在日朝鮮人であり、日本人であっても彼らと何らかのかかわりをもつ人がほとんどであったことを、大田洋子や大江健三郎の原爆文学を引きながら指摘する。そして、こうのが大田たちのように「原爆スラム」を描かなかったことへの懸念を、次のように表明している——

> 『夕凪の街 桜の国』が、被爆六〇年を目前に「日常の視点」を備えた「穏やかな」原爆の記憶を表象化しえたとすれば、その代償に払ったのが、いささか表現はきついかもしれないが、被爆都市の記憶の横領といった事態ではなかろうか。イメージにおける排他的占有といってもよい。いずれにせよそれは、広島という都市の歴史的社会的文脈さえ不可視化しかねないだろう。[30]

しかし、こうのは、広島という都市の歴史的社会的文脈を被爆者の原爆体験と絡めて正確に可視化する目的で、主人公の皆実が日常を送る街を丹念に描こうとしたのだろうか。そうではなくて、特定の場所を基盤にしつつもどんな状況でも展開するささやかな日常の魅力を、それを脅かす被爆による自責の苦しみや死の不安との明確なコントラストのもとに、哀れみ[31]をもって表現したかったからこそ、丹念に描こうとしたのではないだろうか。

本稿で引用した図のいずれを見ても、そこここに当時の日常性を象徴するものや行為が描かれている。それはあくまでも、当時の広島の基町バラックという具体的な時間と場所を基盤にもちながらも、どこでも普遍的に展開しうる日常のささやかだが確かな営みを、クローズアップする目的で描かれていると読みうる。つまり、こうした描写は「被爆都市の記憶の横領」ではなく、ある視点からの被爆都市の記憶の一部の「再現」といえる。

実際の基町バラックの主たる住民であったという在日朝鮮人の生活や、彼らと主人公たちとのやりとりを描かなかったからといって、それがこの作品の日本人読者のナショナルな感情に訴えかけることに直結するとは、私には考えにくい。

確かに、なぜこうのがこうしたことを描かなかったのかは定かでない。しかし、彼女が被爆都市広島を表象していくうえで、それを唯一の被爆国日本の「ヒロシマ」にとどめず、時代と場所を変えて普遍的に出現してしまいかねない「Hiroshima」としても描こうとしていたことは、「広島のある日本のあるこの世界を愛するすべての人へ」（四頁）という表現からも読みとれる。つまり、こうのは決して被爆者の日常の描写をナショナルなレベルでとどめようとはしておらず、「広島／ヒロシマ／Hiroshima」という重層性を念頭に置いて、『夕凪の街 桜の国』を創作したのではないかと考えられる。

三――悲哀の物語としての『夕凪の街 桜の国』――もうひとつの核なき世界の訴え方

結論として『夕凪の街 桜の国』は、原爆が人類にもたらす悲しみと原爆でさえ破壊しつくせない日常に対する哀れみの物語――すなわち、悲哀の物語――として読める。これは、原爆に対する恨みと怒りの物語と

して読める『はだしのゲン』との大きな違いである。

『夕凪の街 桜の国』の作者であるこうのが戦無派世代であるのに対し、『はだしのゲン』の作者の中沢は被爆者・戦争体験者であるため、テーマに対する距離のとり方やアプローチの仕方に違いがでるのは当然であろう。

また、『夕凪の街 桜の国』の時代設定が原爆投下から十年後と約五十年後で、原爆症や密やかに展開する被爆者差別に照準されているのに対し、『はだしのゲン』は主に原爆投下直前から投下後二年間を描いており、被爆の直接的被害や悲惨さとあからさまな被爆者差別に照準されていることも、両作品の差異を鮮明にしている。

加えて、一方の主人公が二十三歳の女性なのに対し、もう一方は十歳の少年――一方的な加害に必死に抗する純真無垢な存在として描きやすい対象[32]――であることも、両者の違いを鮮明にしている。

ただし、こうした差異は両作品の優劣を意味しない。特に核なき世界の訴え方を考えるとき、両者はともに一般市民の視点と人間の感性を重視した側面からそうした世界の実現に訴える、強力な資源となりうる。従って、本論のような原爆マンガの考察は、米欧社会が近年採用している、核テロリズムの脅威とその防衛を強調することで、核なき世界の実現を政治的かつ理性重視で訴えるアプローチ[33]とは異なる核なき世界の訴え方に、私たちの目を向けさせることになる。

現時点で国際的に注目されているのは、オバマ大統領のプラハ演説が象徴する後者であろう。しかし、核なき世界を訴えるうえで重要なのは、こうした政治的・理性重視型のアプローチで形成される国際的な輿論(public opinion)だけでなく、一般市民の日常生活の視点をもとにした感性重視のアプローチが生み出す世論(public sentiment)[34]にも影響を与えることである。

確かにこれまでも、『はだしのゲン』のような作品が、多くの言語に翻訳され日本人を超えて読まれてきたことで、国際的なレベルでの核なき世界の訴えにおいて、世論形成の一翼を少なからず担ってきた。そして今、加害者対被害者の二項対立を超える枠組をもつ『夕凪の街 桜の国』が登場し、この国際的世論形成のもう一翼を担いうることが本稿で確認された。この原爆マンガが核なき世界の訴えに今後変化をもたらしうるか、その影響力が注目される。

［註］

1 二〇〇七年現在、北朝鮮には三八二人の被爆者の生存が確認されていた（「北朝鮮のヒバクシャ 記録映画、十三で上映 援護ない苦悩、カメラ追う」、『朝日新聞』、二〇一〇年九月十九日、朝刊、大阪市内・一地方、二十九面）。また、二〇〇四年一月九日現在、韓国原爆被害者協会の全国登録者数は、二〇一四人であった（在韓ヒバクシャ問題市民会議、資料二　原爆被害者福祉会館、www.asahi-net.or.jp/~hn3t-oikw/、二〇一〇年九月三十日閲覧）。中国人被爆者・在中被爆者の情報が少ないが、長崎の浦上刑務所と広島刑務所に収監されていた中国人捕虜の被爆（浦上：二十七名爆死、広島：十九人被爆十名爆死）情報が、インターネット上で散見される（中国人被爆者について、www.no-more-hiroshima.com/zaigai/zaigai14.htm；広島ＹＷＣＡヒロシマのいまから過去を見て回る会、十。吉島刑務所塀と安野発電所（中国人被爆者・捕虜労働）、ww3.enjoy.ne.jp/~simoiti1329/sensouiseki/11yosijimauasunochuugokujin.htm；共に二〇一〇年九月三十日閲覧）。

2 にもかかわらず、死生学という枠組を明示したうえで原爆／核をテーマにした研究は、私が現時点で知るところでは、次の一点のみである。末廣眞由美（二〇〇八年）「長崎平和公園――慰霊と平和祈念とのはざまで」小佐野重利・木下直之編著『死生学　四――死と死後をめぐるイメージと文化』所収、東京大学出版会：一九九～二三二頁。

3 二〇〇九年データ。阿部信行編（二〇一〇年）『二〇一〇出版指標年報』全国出版協会・出版科学研究所：二一五頁。

4 中野晴行（二〇一〇年）『「消え行く少女」読本――核兵器の恐怖とマンガ』、小学館（『消え行く少女』前編特別付録）。

5 ここに列挙する作品は、すべて広島の原爆体験をテーマにしたものばかりである。長崎を舞台にした原爆マンガは、私の知るかぎり次の二冊のみである。いしかわまみ（二〇〇五年）「アンジェラスの鐘」、『一九四五年　十代の戦争』所収、講談社：三～一一六頁。西岡由香（二〇〇八年）『夏の残像――ナガサキの八月九日』、凱風社。なぜこういった状況なのか、今後のメディア論的分析が望まれる。

6 発見の経緯などについては以下参照：「幻の原爆漫画 発掘 資料館で展示『はだしのゲン』の十六年前連載」、『朝日新聞』、二〇一〇年一月八日、夕刊、東京本社、十二面。

7 湯浅学（二〇〇九年）「（BOOK 読まずにはいられない）『消え行く少女』白土三平著――薄幸な少女と白土漫画の憤怒」、『週刊 AERA』、六月二十九日号、九十二頁。

8 現在は復刻版を入手できる。白土三平（二〇〇九年）『消えゆく少女　前編・後編』小学館。ちなみに、このマンガの後編には、主人公である原爆症の日本人少女と日本に強制連行された朝鮮人男性の李貴道の交流（と悲劇）が描かれている。

9 山岸凉子（二〇一〇年）「夏の寓話」、『山岸凉子スペシャルセレクションⅥ　夏の寓話』、潮出出版、二六五～三一五頁。

10 劇画・旭丘光志、手記・草河達夫（一九六九年）『ある惑星の悲劇――在東京・広島における一被爆者の記録』、講談社。

11 辰巳ヨシヒロ（二〇〇三年）「地獄」、『大発掘』、青林工藝舎、三～三十一頁。

12 中沢啓治（一九七五～一九八七年）『はだしのゲン 第一巻～第十巻』、汐文社。ちなみに中沢は、『はだしのゲン』以外にも原爆をテーマにした数々の作品を描いている。

13 四方利明（二〇〇六年）「境界」で出会った「他者」」、吉村和真・福間良明編著『「はだしのゲン」がいた風景――マンガ・戦争・記憶』、梓出書房、一八二～二一〇頁

14 伊藤遊（二〇〇六年）「『はだしのゲン』の民俗誌」、吉村和真・福間良明編著『「はだしのゲン」がいた風景――マ

ンガ・戦争・記憶』、梓出書房、一四七〜一八一頁。

15 十一言語とは、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、朝鮮語、ロシア語、スペイン語、インドネシア語、タイ語、ノルウェー語、エスペラント語である（ウィキペディア：はだしのゲン、http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%AF%E3%81%A0%E3%81%97%E3%81%AE%E3%82%B2%E3%83%B3#cite_ref-19、二〇一〇年九月三十日閲覧）。また、「世界中の人々に読まれている」とは言っても、どこまでの規模で受容されているのかは定かではない。韓国では、そもそもマンガ読者人口が比率的に言っても日本のように多くはないという状況があることも関係していようが、全十巻合計で約四万部程度の販売部数にとどまった（山中千恵（二〇〇六年）「読まれえない「体験」・越境できない「記憶」、吉村和真・福間良明編著『「はだしのゲン」がいた風景――マンガ・戦争・記憶』、梓出書房、二一一〜二四五頁）。

16 こうの史代（二〇〇四年）『夕凪の街 桜の国』、双葉社。

17 公式サイト（http://www.yunagi-sakura.jp/）

18 双葉社の大東氏に二〇一〇年十月二十九日に電話で確認。内訳は単行本三十万五千部、文庫本八万部である。

19 「時代のカタリスト（三十六）『夕凪の街 桜の国』を歩く――こうの史代氏＋染谷誠氏」、『JMA Management Review』、第十一巻第十二号（二〇〇五年十二月号）、二〇〜二四頁。引用部分は二十一頁。

20 こうの史代（二〇〇八〜二〇〇九年）『この世界の片隅に』（上巻・中巻・下巻）、双葉社。

21 出典は註18に同じ。内訳は、上巻八万九千部、中巻八万二千部、下巻七万八千部である。

22 木村敏（一九七二年）『人と人のあいだ』東京：弘文堂。北山忍（一九九八年）『自己と感情』東京：共立出版。

23 浜邦彦（二〇〇八年）「生き延びた者の〈恥〉――『夕凪の街・桜の国』に見る身体・言語・性」、『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』、第五号、三十〜三十七頁。引用は三十二頁。

24 飯田守（二〇一〇年）「My Book 77　旅への一冊――『原爆の子』（上・下）広島平和文化センター理事長 スティーブン・リーパー」、『アゴラ』、八月号、六十八〜六十九頁。

25 隅田義孝（二〇〇五年）「被爆描いた漫画『夕凪の街　桜の国』、韓国で翻訳出版」、『朝日新聞』、十月十四日、社会

面、十五頁。

26 野田正彰（一九九七年）「遺志の社会化というプロセス」、デーケン・A、柳田邦男編『〈突然の死〉とグリーフケア』、東京：春秋社、二十二～四十六頁。

27 浜（二〇〇八年）前掲出、三十五頁。

28 浜（二〇〇八年）前掲出、三十三頁に引用されたプリーモ・レーヴィ（二〇〇〇年）「恥辱」『溺れるものと救われるもの』所収、竹山博英訳、朝日新聞社、八十五頁からの抜粋。訳文は浜と訳書のものを合成。

29 川口隆行（二〇〇五年）「メディアとしての漫画、甦る原爆の記憶――こうの史代『夕凪の街 桜の国』試論」、『原爆文学研究』、第四号、八十三～九十二頁。引用部分は八十八頁。

30 川口（二〇〇五年）前掲出、九十頁。

31 ここでいう「哀れみ」とは、しみじみとした情愛や慈愛の心という意味である。

32 大月隆寛（二〇〇七年）「『戦争＝悲惨』という図式の貧困――『体験』を別の『物語』に転生させてゆくことの必要性を考える」『正論』平成十九年十一月号、二一〇～二二二頁。

33 この路線は、二〇〇七年一月四日の米紙『ウォールストリート・ジャーナル』に、「核兵器なき世界（A World Free of Nuclear Weapons）」と題する記事を掲載したジョージ・シュルツ元米国務長官、ウィリアム・ペリー元米国防長官、ヘンリー・キッセンジャー元米国務長官、サム・ナン元米上院議員が、構想・推進してきたものである。彼らは、Nuclear Security Project（NSP：核安全プロジェクト）を立ち上げ、全世界に向けて核兵器なき世界の早急な実現の呼びかけと、その実現のために踏むべき十個の具体的ステップの提示をしている（http://www.nuclearrippingpoint.org/nuclear_security_project/index.html；二〇一〇年九月三十日閲覧）。バラク・オバマ米大統領による二〇〇九年四月五日のプラハ演説（いわゆる「核なき世界」演説）は、「核テロリズムに対抗するためのグローバル・イニシアチブ」への言及があることからも、この路線を継承したものであることがわかる。

34 佐藤卓己（二〇〇三年）「あいまいな日本の「世論」」、佐藤卓己編『戦後世論のメディア社会学』、東京：KASHIWA学術ライブラリー、十一～二十三頁。